大杉栄の革命理論に関する私論（上）

諸伏　恒

目次

第一章　大杉革命論の視座
第二章　大杉革命論の陥穽
第三章　大杉反戦反軍論の問題性
一　平民社非戦論の地平とは何か
二　第一次大戦と大杉の反戦反軍思想
三　天皇制「権力」イデオロギーと大杉の反戦反軍思想
（以下次号）
第四章　大杉直接行動論の批判的検討
一　幸徳直接行動論の問題点
二　大杉直接行動論の地平
三　戦時ゼネスト論の問題点
第五章　大杉のロシア革命論
一　「永久革命」論者としての大杉栄
二　ソビエト論について
三　労働者反対派やマフノ運動に対する見解

第一章　大杉革命論の視座

明治から大正期にかけて、それなりの自己の革命論を未形成ながらももっていた革命家として、大杉栄は極めて特異な存在である。

大杉は一般に中江兆民―幸徳秋水の流れを汲む革命家と言われている。そう規定してもおそらく間違いではないであろう。幸徳を明治反逆児の最も代表的存在とすれば、大杉は最も代表的な大正反逆児であると言えるであろう。

さて、大杉革命論の特異性とは何なのか。大杉革命論の視座は一体どこにあったのか。この問題に答える前に、まず大杉革命論の大体の概略的な構図を見ておきたい。

私は大杉の革命論は、彼の革命家への出発をなす原点としてあった反戦反軍思想と、直接行動論を両軸としていたのではなかろうかと思う。この二つの思想は明治から大正にかけて日本民衆に最も鋭くつきつけられた問題への所産であり、大杉はこの二つの問題に最も革命的に取り組んだ先駆者であろう。大杉はこの二つの思想を両軸としながら、具体的な革命的戦略として戦時における労働者の総同盟罷工と軍隊内反乱を考えていたようである。

ただ、この点について付言すれば、大杉のこの二つの思想は最後まで革命論的に統一的に構築されることもなく、それ故に運動論の中でも、また革命への戦略や戦術の中でも統一的な視座の上に立って提出されることはなかったと言える。この最大の欠陥はやはり彼に組織論と権力論がタブー視されて、追求されなかった点にある。

さて、大杉は革命を、さらに革命後の将来社会を如何に考えていたであろうか。

大杉にとって革命とは、マルクス主義的な政治革命―経済革命という段階的な過程としてではなく、それらを同時に実現せんとする全体的な社会革命として把えられていた。そしてさらに大杉にとって革命とは永久的に展開する人間社会の総体を変革する運動過程としてとらえられていた。その意味で大杉は一種の「永久革命論」者であったといえる。（トロツキー等とはまた異なった意味での。）（この点の論証は第五章でのべることにする。）

それ故に、大杉にとっては、マルクス主義的に言う過渡期とはこの革命の永久的な一運動過程としてあり、過渡期におけるプロレタリア独裁権力の概念は彼にはない。

次に将来社会論についてであるが、彼はもとより未来社会の予定調和的な定型化を否定しているわけであるが、そしてそれは基本的にはバクーニン流の「破壊―革命」の中に未来建設のエネルギーを、方向を見い出していくという発想法に帰因している。それ故将来社会へのまとまった建設論は述べていない。強いて挙げればプルードン―クロポトキン流の自由自治的な連合社会論を思い描いていたのではなかろうか。

以上、大杉革命論の大体の概略的な構図を述べてきたが、その立ち入った検討に入ることによって先の問題に答えていきたい。

私は前に大杉革命論の特異性といった。もし、大杉革命論がたんにアナキスト革命論の一般的焼き直しならば、何もとりたててその特異性を論ずる必要はない。彼の革命論が単なるアナルコサンディカリズムの革命論の枠を越えた萌芽を内包している点があるからこそ、特異であるといえる。しからば、その特異性とは何なのか。それはどこからくるのか？

大杉革命論の特異性の最大の根拠は彼の革命哲学に帰因する。すなわち、彼の革命的な「生の哲学」に。彼の革命論の背景にもこの革命的な「生の哲学」は一貫して流れている。しからば、この革命的な「生の哲学」とは何なのか？　そして、それは彼の革命論の中に具体的にどのように生かされているのか？

彼の「生の哲学」の核心的な背景となっているのは、ベルクソンの哲学であり、彼の「生の哲学」の革命哲学への構築は、ベルクソン―アナキズム―サンディカリズムの彼自身の批判的摂取と統一的把握の産物であるといえる。だとするならば、大杉はこのベルクソンの哲学から如何なる革命的原理を見い出したか。そしてそれをアナキズム哲学やサンディカリズムの運動論と如何に関連させて具体化したのか。

大杉はベルクソン哲学の次のような考えを自らの革命的原理として取り込んだ。

㈠ベルクソン哲学の生命体としての「力の哲学」と「運動の哲学」を！

㈡ベルクソン哲学の核心たる「生命の純粋持続」としての「生命の永遠的能動性」を人間の生命活動の革命的な永久的運動として。

㈢生命的実在の「持続運動」の本能的な直観主義を。

㈣人間の創造的進化運動の未知的な不定型性を。

一般にベルクソン哲学には保守的側面と革命的側面が混在しており、それ故人によっては彼の哲学はブルジョワ的な神秘主義をふりまく観念論哲学であるとされている。だが、大杉にあっては「ベルクソン哲学の保守的側面と革命的側面との両面を見、後者をかなり高く評価した」（船山信一著『大正哲学史』）のであり、「『生の哲学』から主観主義的なエネルギーを引き出すことによって堺らの待機主義と対決し、それを克服してゆこうとした」（大沢正道解説―大杉栄選『無政府主義の哲学Ⅰ』）点は確かに事実であろう。

ところで、大杉がベルクソン哲学から革命的側面として引き出した最大の点は、生の「力の哲学」＝「運動の哲学」ではなかろうか。大杉が人間をまず「生命的存在」としての「生命体＝運動体」として把え、同時に「社会的存在」として把えている点は面白い。

それ故に大杉にとって、人間とはその本質性として生命的運動体としての「闘争力、自主自治能力、創造力」をもっており、それは社会的存在としての人間の「社会的な闘争力、自主自治能力、社会的創造力」として具現化されるものとして理解されている。そして実体的にはこの能力の社会的な体現者として労働者大衆に注目し、大杉が後年労働者の革命的資質に最も信頼をおく根拠ともなるわけである。

それ故に、大杉にとって革命運動とは、厳然たる「征服の事実」に対する人間の「生の拡充」であり、「生の充実」であるわけである。すなわち、「征服の事実」に対する永遠的な反逆であり、抵抗であるわけだ。そして、その中にこそ人間の「創造力、自治自主能力、闘争力」の開花をみるわけである。

大杉が「今や生の拡充はただ反逆によってのみ達せられる。新生活の創造、新社会の創造はただ反逆によるのみである」と述べ、「力は直ちに動作となってあらわれねばならない。……活動そのものが力の全部なのである。活動は力の唯一のアスペクトである」と言う時、そのことを明白に示している。

まさに大杉にとって「革命」とは、人間の「生命活動の根源的躍進」（ベルクソン）の爆発に根ざすものであると把えられていたのではなかろうか。それ故に、革命の根本問題がマルクス主義的に、具体的に政治的「権力の問題」として凝縮して把えられるのではなく、「人間の根源的な存在」という哲学的な問題として把えられていたのではなかろうか。

次に第二点の問題があるが、ベルクソンは生命の創造的進化運動は「不可分の連続性と創造性」をもって「どこまでも推進していく」永久的運動過程として把えている。しからば、基本的にこの認識に立っている大杉の「生の直接行動」としてある革命運動は止むことなき永久的な運動過程として把握されることになるのではなかろうか。このことは、「力＝エネルギーの発現」としての運動は絶えず新たなエネルギーを再生産しながら、永久的に展開してこそ「創造的進化を克ち取る」という「生の必然の論理」すなわち、「力の哲学」と「運動の哲学」に帰因していることとも関連している。それ故に、大杉にとって革命とは全体的な社会革命の「永久的展開」としてあったわけである。この考え方がアナキズムの「反国家＝反権力」運動の永続的展開と結合させられていったと言ってもよい。（詳しくは第五章参照）

第四点の大杉の将来社会論の考え方も、ベルクソンの哲学とバクーニンの「総破壊―建設の論理」とプルードン―クロポトキンの「自由連合論」とが、未統一の形で提出されているといってよい。

第三点のベルクソン流の反理知主義―直観主義は、大杉の革命論の中では労働者の不定型な革命的実践運動の中に基本的な方向と指針を求めるという、「革命的経験主義」の形として現われており、それが大杉革命論の強みでもあり、弱味ともなっているのである。（この点の詳細な検討は第四章で……）

総じてスティルナー流の、極めて個人主義的色彩の濃い革命的な「生の哲学」を基礎にしながら、具体的な革命的運動論をどのように提示していったのか？　すでにみてきたように、ある面では極めて主観主義的で、観念的でさえある、革命哲学を背景にもった大杉が、その革命論の中で特異なる実践的優越性を発揮した根拠はどこにあるのか。

㈠第一点はその鋭敏で透徹した直観主義ともいえる時代認識の確かさと深さにある。明治から大正期にかけて、大正時代の時代的特質性を誰よりも早く、正しく認識していたのは大杉ではなかろうか。明治社会主義の雄堺利彦と対比させてみたら、極めてはっきりするであろう。

㈡第二点は運動家としての着眼や判断の的確さにある。明治社会主義運動たる反戦運動には誰よりも深く取り組み、大正社会主義運動の推進力として労働運動の革命的爆発にいち早く眼をつけた点などはそれを示す。

㈢第三点は彼の「革命的経験主義」ともいうべき考え方である。これは揺籃期の革命運動での思想的バネと実践的バネに帰因しているが、しかし革命論の深化の上では一つの障害となっている点も見落せない。

彼のような革命哲学を背景にし、右のような実践的立場を立脚点としながら構築されんとした大杉革命論の今日的な特質は何なのか？　大杉の「監獄社会学」ともいうべき、特異な社会哲学を背景にした彼の革命論の特質と斬新性はどこにあるのか？

㈠マルクス主義的な革命の段階的分化に対して、全体的な社会革命の必要性を提示したこと。

㈡革命と建設の同時的かつ永久的な運動展開を彼独特の哲学的把握から提示したこと。

だが、このような点にたった大杉が実際の運動過程の戦略としては一体いかなる方向を提示したかといえば、大正初期彼が著しく傾斜したサンディカリズムの総同盟罷工とフランスの反戦思想家エルヴェ流の戦時一揆説を、運動論的に折衷した戦時ゼネスト論と隊内反乱論である。（詳しくは第四章参照）

これはこの二つが思想的かつ実践的な統一した運動論として提示されたというよりは、どちらかといえば、革命家としての大杉の直観から折衷されたといった方が妥当である。これは、大杉革命論の両軸たる反戦反軍思想と直接行動論の革命論的深化が、克ち取られ

なかったことに帰因しているであろう。すなわち、彼が立脚した反戦反軍思想の地平と直接行動論の地平とが一体如何なる関係にあるのかがとうとう追求されえなかった点にある。彼自身も、それなりの努力を試みてはいるが、しかしそれら二つの地平を統一した地平へと押し上げるには、別の革命的地平に立ちきることが要求されたのである。その別の革命的地平こそ、彼なりの階級形成論―組織論と権力（自己権力）論の構築である。

私はこのことの必要性を大杉はある面では気づいていたのではなかろうかとさえ思う。気づいていたにもかかわらず、あえてしなかった。何故か？……大杉独特の「力の哲学」やバクーニンの思想をそれなりに摂取していた大杉が、あえてそれらに取り組まなかった理由はどこにあるのか。私の想像であるが、組織論や権力論が本質性としてもつ負の功罪、負の要因を、彼が組織論や権力論の展開の中で真に超克する確信がもてなかったことに最大の理由があるのではなかろうか。

もちろん当時アナルコサンディカリズムの中で組織論や権力論を積極的に展開することはタブー視されており、それらは否定すべき課題とされていたことは事実であるが、しかしそれだけの理由で大杉がこの重大な問題を回避したとは思えない。

（註）もっと奇異に感ずるのは、あれほど権力を憎悪していた大杉が、日本における権力の化身たる天皇制権力に関するまとまった論文を書いていないことである。たしかに、大逆事件以来「天皇制」問題は最大のタブーであるが、しかし、大正デモクシー論争において天皇制問題が論じられた時でも、大杉は何も言及していない。私はやはりこの理由は右の点にあったのではないかと思う。（詳しくは第三章参照）

第二章　大杉革命論の陥穽

大杉革命論の視座と意義は第一章でみてきたわけであるが、大正期の革命運動で極めて特異な活躍をした大杉の革命論の限界と陥穽を今度は検討してみたい。具体的に立ち入った検討は第三章以下で行うことにして、ここでは全体的な問題を挙げておきたい。

まず大杉革命論のおもな欠陥はどこにあったのか。そしてなにゆえかという問題である。

㈠まず第一点はベルクソン流やアナルコサンディカリズムの影響を受けて「理論」や「知識」の一面的否定と逆に「経験―本能―直観」の一面的強調にあった。それ故に、極めてすぐれた時代認識と情勢分析を予言的におこなっているにもかかわらず、具体的な戦略―戦術を否定している点にもみられる。そもそもベルクソン哲学やアナキズム哲学の革命的側面にせよ、革命哲学としてはともかく、革命論の構築としては極めて否定的側面をもっていることに注意しなければならない。この点の克服こそが「現実的な力」を持ちつづける一つの課題でもあることに大杉は無自覚であった。

㈡大杉の革命論の中に全く階級形成論がないことで、いやむしろそれを否定している点さえある。大杉の階級形成論といえるものは、強いてあげれば、生命的存在であり、社会的存在でもある人間がその本質性としてもっている「社会的な闘争性、自主性、創造性の徹底化」である。この点は、やはり「生の哲学」やアナキズム哲学の負の側面としてある。労働者（人間）の本質性が必ずしも現実性として具現化するとは限らないのである。この点は大杉の労働運動や革命運動、さらに革命についての把握にもみられる。大杉の根源的で革命的な把握が、現実的には最も弱い環としてしか表現されえない点に問題があったといえよう。

㈢第三点は権力論や国家論に対する否定的強調による回避である。問題はこの否定すべき権力や国家を、消滅すべき現実的根拠を、具体的な革命運動の土俵の中に見い出さねばならない。大杉は一面では第一章でみた如く、極めて革命的側面を引き出しているのだが、それでは解答にならない。現実性に対して本質性一般を対峙させるのみでは、観念の域を出ない。アナキズムの反権力―反国家論がその本質として「反逆と団結」を単に対峙させることだけでは、現実的否定性を越えたことにはならない。また、大杉の革命論から導き出される、全体的な社会革命の永久的展開を運動的に提示するのみでも克服したことにはならない。やはり「組織を止揚する組織論」を如何に構築していくかにかかっている。ところで、以上三点を挙げて述べてきたが、大杉革命論の最も問題とすべき陥穽について述べてみよう。

それは彼の革命論の主観主義的で非合理主義的側面の否定的な開花であり、彼の革命的運動論と革命哲学の断絶的乖離である。大杉は、自己の革命論の一側面でもある主観主義性、観念的撞着性を持ち前の運動論の革命性で克服している。この点は革命家大杉のすぐれた長所でもあるが、逆に短所でもある。この脆弱性が最も具体的に露呈してくるのがやはり組織論であり、権力論である。（詳しくは第五章）私は大杉の革命論が大正革命運動史の一産物でしかないとはいわない。大杉革命論のもつ今日的な意義と限界を把え返して正当に評価する必要がある。

大体、大杉の革命論の独自的意義そのものが未だ十分に検討され、位置づけられていない。ひどい極論になると、大杉などに革命哲学や革命論などない。彼は単なるアナーキスティクな運動屋にすぎないと言い出す始末だ。もとより私は大杉を世上一般の如く、アナルコサンディカリストと言う枠で規定していない。もちろんそれらの思想の多大な影響を受けていることは事実だ。また大杉自身も自らを「アナキスト」だと自称している。

だが、私は大杉はたんにアナキスト、サンディカリストではくくれない、「大正反逆児」ともいうべき、特異な代表的な「大正革命家」ではないかと思っている。何故なら、良きにしろ、悪しきにしろ、大杉の革命論は大正時代の革命運動の革命性と限界性を極めて強く体現しているからである。

第三章　大杉反戦反軍論の問題性

㈠　平民社非戦論の地平とは何か

明治社会主義の思想的かつ運動的原理は、まさしく非戦（反戦）運動とその思想にあったのではなかろうか？　明治維新以来、幾多の社会思想が欧米より輸入され、啓蒙されたわけであるが、それらの思想とそれに基づく運動が日本の土壌の中で、最初に遭遇した試練こそ、日露戦争を契機とする非戦（反戦）運動ではなかろうか。

日本最初の帝国主義戦争たる日露戦争に反対するさまざまな運動が多方面から湧き上ったが、その運動の中心的核こそ平民社グループの非戦運動であった。まさに「明治中期の社会主義運動は反戦運動としてあらわれ」「平民社の社会主義運動は反戦の一点に集中された」のである。

開戦時の一九〇四年には『平民新聞』第十号（一月七日）をもって非戦論特集を組み、社説でも「吾人は飽くまで戦争を非認す」という論文を載せている。この論文の執筆は明治社会主義者の雄幸徳秋水であるが、この論文の中で秋水は日露戦争について「之を道徳に見て恐る可きの罪悪也、之を政治に見て恐るべきの害毒也、之を経済に見て恐る可きの損失也。社会の正義は之が為めに破壊され、万民の利福は之が為めに蹂躙せらる。吾人は飽くまで戦争を非認し、之が防止を絶叫せざる可らず」と述べている。

また、幸徳は、同じ『平民新聞』八月二十二日号の中で、「社会党の戦争観」と題して、帝国主義戦争の本質について「戦争の目的は植民地及び新市場の拡張に在らん、植民地及び新市場の拡張の目的は果して何れに在りや、国民多数の貧困は之が為めに除かるべき乎。……否な、戦争は常に政治家資本家の為めに戦わるるのみ、領土や市場は常に政治家資本家の為めに開かるるのみ、多数国民、多数労働者、多数貧民の与り知る所にあらざる也」と叫び、それに対する社会主義者の態度として、「今の貧困の苦痛や、戦争の悲惨や、其の罪実に現時社会の組織が少数階級の利益を基礎とするに在り。吾人社会主義者は実に這箇の社会組織を改更して、社会全体の利益を基礎とせるもの所謂社会主義制度の確立を主張する者なり。人の戦争絶滅の方法を問う者多し、即ち之を以て答うと言う」と述べている。

以上をみてもわかるように、幸徳に代表される平民社非戦論は、

㈠戦争の悲惨と政治家資本家の非道を国民に訴える人道主義的な合法的平和主義の見地

㈡戦争の本質論と非戦運動論の無媒介的な対峙

㈢非戦運動の大衆運動的展開というよりも啓蒙主義的な宣伝

等の見地にたっていた。それ故に一部の少数の人道主義者、平和主義者やキリスト教徒、社会主義者には大きな共鳴を与えたが、それ以上を出なかった。大衆運動への波にはならなかった。日本中を吹き荒らした愛国主義や軍国主義の押し寄せる波を打ち砕けなかった。

その主要な原因はどこにあったのか。そして平民社非戦論を乗り越える方向はどこにあったのか？

㈠まず、日露戦争に向けての天皇制権力の最大のイデオロギー攻撃たる愛国主義―排外主義を内容とする天皇制イデオロギーを打ち破るべき、革命的イデオロギーが大衆的に対峙されなかったこと。これはすぐれてブルジョワナショナリズムを超克すべきインターナショナリズムを如何に克ち取るべきかにあった。もちろん、平民社の反戦主義者もロシアの反戦運動や革命家との連帯を試みたが、それはイデオロギー的深化の直接的な契機とはなっていない。

㈡次に、非戦運動を啓蒙主義的な宣伝活動から、大衆運動の中心的な環として位置づけられなかった点にある。しかし、これはある面では明治非戦運動の歴史的限界を示すものでもある。何故なら、大衆運動の絶対的基盤たる労働運動の歴史的限界に帰因しているからである。

（註）この点大杉は直接行動論を媒介にして労働運動―大衆運動の側面からの反戦反軍運動の結合を試みんとしていたが成功したとは思えない。（詳しくは後述）

㈢非（反）戦運動や反軍運動の当然のいきつくべき核心的問題としての権力論―国家論の革命論的構築の必要性が認識されなかったこと。この点についていえば、日露戦争時における幸徳は立憲的合法主義者の域を出ていなかったと思われる。それは幸徳の「夫れ所謂民主主義を以って、共和政治の尊有物となし、立憲政治と両立せずと信ずる者あらば、是れ大いなる誤り也」と言う発言にもあらわれている。

ところで、この時期の大杉の立場はどうであったのか。彼自身、自らの軍人の卵と言う生い立ちからも、また当時の権力的象徴としての「天皇の軍隊」に対する憎悪と噛りからも、反戦運動には人一倍の関心をもっていたはずである。

彼自身の反戦運動の具体的な関わりは、一九〇六年、西川光次郎、山口孤剣等の主宰する雑誌『光』に訳載したフランスアナキズムの反戦論文「新兵諸君に与う」が新聞紙条例違反秩序紊乱罪で起訴されたのに始まる。その後精力的に欧米の反戦思想の翻訳紹介をしており、当時の社会主義者の中で最も活発に取り組んでいたといえる。

具体的には、フランス社会党のギュスタヴ・エルヴェの反戦思想を中心に、一九〇五年「社会主義と愛国心」、一九〇六年には「これを命令するものに発砲せよ」「新兵諸君に与う」等である。

この時期までの大杉の思想的立場は主として外国思想文献の紹介であって、彼自身特に独自の思想的立場があったとは思われない。それ故平民社非戦論の地平をほぼ継承していたのではないかと思う。また、特に欧米の反戦思想を自らの革命論へと批判的摂取したと思われる形跡もない。

しからば、大杉が彼の原点ともいうべき反戦思想を踏台にして、何を彼の革命論構築への道程の出発点としたのか。その直接的契機は何であったのか？

それはやはり一九〇六年、東京神田の錦輝館で行なわれた幸徳秋水の帰国演説「世界革命運動の潮流」であり、一九〇七年の『平民新聞』二月五日号に載った「余が思想の変化」で述べられた「直接行動論」の提示であり、革命論の萌芽的な端緒として提示された「直接行動論」ではなかったのか？　そして、その批判的摂取と革命論構築の下地として千葉「監獄社会学」の形成があったのではなかろうか。

それならば、大杉はそれらを背景として真に平民社非戦論を乗り越え、反戦反軍思想の革命論的位置づけに成功したのであろうか。厳密に解答すれば「否」と答えるしかないだろう。その最も端的な事実が、次の皮肉な組み合わせの中にある。すなわち、

「第一次大戦と大杉の反戦反軍思想」

「天皇制イデオロギーと大杉の反戦反軍思想」

㈡　第一次大戦と大杉の反戦反軍思想

極めて奇異な事実であるが、日露戦争時にあれほど激しく叫ばれた反戦論や非戦論が、一九一四年の第一次大戦の勃発以降我国においてほとんどと言ってよいくらい叫ばれもせず、行なわれずに通り

すぎている。華々しく展開された大正デモクラシーでも、反戦反軍思想や運動が直接の論争対象となったことはない。この時期に一貫して反戦反軍思想の紹介と取り組みを行なっている社会主義者はといえば、大杉一人といってもよいのではないだろうか。しかるに、この大杉といえども、具体的な反戦反運動を何もといっていい位おこなっていない。

一体日露戦争時あれほど華々しかった非戦論が、その後一九一四年の第一次大戦時にほとんど立ち消えている原因はどこにあったのか？

まず考えられることは、日露戦争に比べて第一次大戦が日本をして直接的な戦争の渦中に引きずりこまず、間接的当事国とした点があげられよう。つまり、日露戦争に比べて国内の直接的な緊迫性が薄かったという点である。

第二点は大逆事件以来の冬の時代の天皇制権力による物凄い狂気じみた大弾圧のため、反戦運動を巻きおこすべき地平が思想的にも実践的にも克ち取られていなかった点があげられよう。

第三点は実はこの点が最も重要であるのだが――平民社非戦論が思想的にもかつ実践的にも深化されなかった点である。堺利彦を始め明治社会主義者たちのこの点の無自覚はいなめないと言える。

第四点は極めて密接に第三点と関連していることであるが、思想的にも実践的にも当時日本において反戦運動を展開することは、天皇制権力とそのイデオロギーとの対決を覚悟しなければならなかった点であり、それは同時にそれなりの革命論の構築を不可避としたという点である。

革命運動の中で反戦運動ほど最もナショナリズムとインターナショナリズムの根底的な問題をつきつけるものはない。第一次大戦における第二インターの崩壊も、すぐれてこの問題をプロレタリア革命に向けて如何に応えるかにあった。平民社非戦論がその後いかなる点で深化されなかったと言う問題も、密接に右の問題と関連している。

明治反戦思想とその運動が何故に第一次大戦に開花しなかったのか。その要因は困難な客観諸条件のみに基因するばかりではなく、もっと根本的な要因があったのではないのか？

いろいろと考えられるが、主な点を挙げてみると次の点にあったのではないかと思う。

㈠平民社非戦論がインターナショナルの視点から改めて問い返されなかった点。

㈡第二点は平民社非戦論が果して日本における最も露骨な帝国主義的な愛国主義と民族主義イデオロギーたる天皇制イデオロギーに具体的に対決したのかどうかということが問題にされなかった点。すなわち、帝国主義的民族主義イデオロギーとの対決を具体的に天皇制イデオロギーとの対決としてではなく、抽象的な愛国主義批判―民族主義批判しかなされなかった点である。

㈢それは当然にも反戦反軍運動の大衆的な運動論としての提起のみならず、革命論へと上昇せしめていかねばならないことに対する問題をつきつけてくるわけであるが、このことがほとんどなされなかった点である。

実際問題としてこれらの問題は大正革命運動の最も重要な課題として残されたわけであるが、この問題にそれなりに不十分ながら最初に取り組んだのは大杉であったといえよう。これからしても大杉

の反戦反軍論は特筆されるべき位置を占めているのだが、残念ながらこの点からの大杉研究は今日ではほとんどなされていない。

ところで、以上の点をふまえながら大杉の反戦反軍論をみてみたい。

大杉の反戦反軍思想のほとんどは欧米、特にフランス社会党の反戦運動家エルヴェの影響を著しくうけており、極言すればその焼き直し的側面すら多分にある。私の最も関心があるのは、大杉の反戦反軍論が果して第一次大戦という歴史的背景を契機にして、前述の課題に如何に答えたかという点である。

まず第一点は大杉がこの第一次大戦をどのように把握していたかといえば、「戦争は資本家制度の必然の結果である。国内の労働者に十分なる消費を禁じつつ、無秩序に諸種の生産を行なう今日の資本家は、いきおい外国にその商品のはけ口を求めていかねばならぬ。このはけ口の競争、詮じ詰めれば、近代の戦争の原因はすべてここにある。」（「いわゆる政府的思想」）それ故に、この「国際戦争等も又――資本家階級の利益の為めの戦争である。労働者階級は、国際戦争によって、その財産と自由と生命とを危険に陥いられこそすれ、何等の利益とするところもない。従って、労働者階級は極力この国際戦争に反対せねばならぬ。」（「欧州の大乱と社会主義者の態度」）と述べている。

すなわち、今度の第一次大戦が「資本家制度（社会）の必然の結果」としておこる資本家同志の略奪戦争であり、従って労働者にとっては「生命と自由の危険」と犠牲しかもたらさないことを喝破している。

この点の戦争把握は明らかに幸徳秋水の考え方を発展させたものとしてある。それは「資本家社会での戦争の必然性」とその戦争の「資本家間の略奪戦争としての「階級性」をあきらかにした点である。にもかかわず、日本はともかく欧米では愛国主義的な民族主義イデオロギーによって、この戦争の㈠「防衛戦争か攻撃（侵略）戦争か」さらに㈡「愛国主義―民族主義か国際主義か」がその革命性を問うものとしてつきつけられていたのである。

この点に関する大杉の立場は次のエルヴェの思想的立場をほぼ継承していると言ってよい。

「如何なる場合にも、国際戦争に於ては、社会主義は現在の国家を防衛する為に一滴の血、一寸の間をも与うべからず。開戦宣言は、いずれの国よりも発するも、吾人の生命を危険ならしむるに於て同一なり。替に現在の国家を防衛せんが為よりは、むしろこの機に乗じて社会的革命を試むる為に吾人の生命を賭すべきなり。」（「社会主義と愛国心」）

すなわち、帝国主義戦争の「攻撃性―侵略性」も「防衛性」も、プロレタリア階級にとってどうなのかと言う「階級的視点」に立って判断している点である。まさに帝国主義戦争に対するプロレタリア階級的視点とは、ブルジョワジーの略奪戦争の論理に対しては、はっきりプロレタリア階級戦争の論理を対峙させることであり、ブルジョワジーの愛国主義―排外主義的民族主義に対して国際主義を対峙させるとは、ブルジョワ的愛国主義や民族主義の階級的虚妄性をあばき出すことにあった。

第一次大戦における反戦運動の質は日露戦争時に比してここまで追求されねばならなかった。しからばこの点は日本においてはいかなる具体的な問題をつきつけていたのか？

㈠第一点はあきらかに労働運動を軸とした大衆運動の革命的飛躍であり、組織化であった。

㈡第二点はあきらかに労働者大衆の思想的かつ実践的な革命的武装の問題であった。

㈢第三点は天皇制権力と天皇制イデオロギーに対する真向うからの対決の問題であった。

しからば、大杉はこれらの問題に如何に答えていったか？

まず第一点の大杉の階級戦争論についていえば、それはあくまでも抽象的な一般論の宣伝でしかなかった。「今回の大戦乱がまさに起こらんとする時、僕らの期待はこの国際戦争に対する各国労働者の反乱にあった。動員もしくは宣戦に先立つ大示威運動！　ついで総同盟罷工！　そしてついに社会的大革命。僕らはそんなことまで夢みていた。」（「戦争に対する戦争」）

しかし、当時の状況から考え、この思想的立場の実践的提起はおよそ無理な話であった。そのような中でこのような思想的宣伝を公然と喝破するだけでも、大杉の思想的高さを示すものとしてあった。当時の堺利彦の「国家戦と階級戦」にみられる客観主義的反戦論とは著しく立場を異にしているのである。

ただ、この時期にエルヴェの戦時労働者一揆説ともいえる戦争反対ゼネスト論を大杉も叫んでいる。エルヴェのこの考えはフランス国内においてはかなり大きな影響を与えていたが、国際的には孤立していた。特にドイツ社民党左派のカール・リープクネヒトはこのエルヴェの思想に対して次の点で反対した。

㈠インターナショナルな規模ではなく、一国的な規模でのゼネストでは勝利することはできない。

㈡戦争反対ゼネストを打ち抜くには、余りにプロレタリア階級の思想的かつ実践的準備が不十分である。

たしかにこの指摘はエルヴェの性急な戦時ゼネスト論の急所を突いている。フランスG・G・Tはフランスナショナリズムに流され右傾化し、エルヴェのこの提起も現実性を喪失していった。エルヴェ自身も彼の反愛国主義思想が伝統的なフランスナショナリズムを超克することができず、また彼の戦時ゼネスト論もその現実性を喪失していく中で、排外主義的民族主義へ転向していったのである。

ところで、大杉はこの点についてどうであったのか。この時期の大杉はエルヴェの急進的な戦時ゼネスト論を思想的には宣伝しているが、実践的には日本的状況にあわせて極めて地味な出発をしている。

確かに反戦運動についての運動論的提起は何もしていない。それは、この時期の反戦運動の質と日本国内の運動状況の低迷との余りに大きなギャップに規定されていたといえる。

大杉はこの時期――一九一四年文芸誌『近代思想』を廃刊して、労働者新聞としての『平民新聞』を発刊し、翌一五年には旧来のサークル的な「サンヂカリズム研究会」から、多少大衆的で政治的な「平民講演会」等を主催するなどして労働運動―大衆運動への足を踏み入れている。

エルヴェの思想を長所も短所も併わせて――半ば焼き直し的とも思える位忠実に継承している大杉が、エルヴェ的排外主義への転落をしなかった要因は、やはりその実践的な蓄積と経験とフランスと日本との国内的状況の相違等であろう。

さて、我々が大杉反戦論で最大の問題とすべきは、天皇制権力と

そのイデオロギーに彼が一体どう答えたかである。

㈢　天皇制「権力」イデオロギーと大杉の反戦反軍思想

私が最も不思議に思うのは、あれほどまでに帝国主義者の愛国主義や軍国主義を憎悪し、批判していた大杉が何故にその最も象徴的な化身たる天皇制権力とそのイデオロギーに言及しなかったかという点である。

明治以来日本の「紳士閥の政府」は「天皇の政府」であり、憎むべき足尾暴動流血弾圧者たる軍隊は「天皇の軍隊＝皇軍」であり、帝国主義的愛国主義や民族主義は具体的には天皇主義―天皇制イデオロギーであった。はっきり言えば、日本における反戦反軍思想やその運動の展開は、天皇制権力とそのイデオロギーとの対決以外の何ものでもない。第一次大戦を契機として大正デモクラシー論争の重要な一環としてあった天皇制論争にも、大杉は何も具体的に言及していない。

旧来の明治天皇制絶対主義がブルジョワ階級とプロレタリア階級の政治的―社会的抬頭により、その支配構造の再編を余儀なくされ、天皇制ボナパルティズムへ移行する過程でもあったこの大正期は、支配階級にとってもプロレタリア階級にとっても極めて変化の激しい「揺籃期」であった。そして、天皇制のイデオロギーも明治天皇制にみられた神権的な―神格的な天皇制イデオロギー体系は崩れ、新たな装いをもって近代帝国主義国日本の国体を精神的に統合せしめていくイデオロギーとして再編されんとした時期であった。

それは具体的には日露戦争から第一次大戦までを一つの契機としている。すなわち、新たに帝国主義的民族主義までをも包括した、近代帝国主義国家に相応した「皇国イデオロギー」の形成としてあったのだ。一九一二年～三年頃の上杉慎吉らの天皇主権論と美濃部達吉らの、国家主権―天皇機関説の論争もこのような歴史的背景の中でなされたのである。それ故、この時期においてはまさしく帝国主義的な愛国心を語るにせよ、民族主義を語るにせよ、「天皇の国」「天皇の民族」を叫ぶ天皇制イデオロギーと対決せざるをえないわけである。

日本におけるナショナリズムの超克とインターナショナリズムへの出発は、この天皇制イデオロギーとの対決に始まる。もちろん大杉は民族主義そのものの階級的イデオロギーとしての虚妄性をあばいてはいる。

大山郁夫の民族論を批判して（「民族国家主義の虚偽」）、大山の言う民族性の根拠としての「共同の文化、共同の伝統、共同の歴史、共同の追憶及び共同の栄辱感情」が全く普遍的な実体をもたない「虚偽の共同性」であり、大山の言う「歴史の坩堝において（諸民族が）融解し、陶冶し、合成して、渾然たる単一民族」へ結合していく事実は「実は、民族間の征服の中の、一民族の共同文化の破壊、共同伝統の断絶……圧制的支配」と「武力的征服」の事実の上にたった民族であり、「天皇の民族」たる大和民族も過去をもって生成した民族であることを喝破している。そして民族的な共同的統一性については、「利害関係の全く相反する両極階級を含む一社会の中に、共同の文化、共同の伝統、共同の歴史、共同の追憶、共同の栄辱感情などが本当にある筈はない。もしあるとすれば、それは瞞着され、強制された妄想である」として否定している。

このように大杉自身一般的にはナショナリズム批判をしながら、

天皇制ナショナリズムの糾弾をしていないのは何故なのか。大杉のこのような傾向は、彼の反軍論の中にもみられる。多分にエルヴェの思想的な受け売り的影響があったにせよ、何とも解せない。

彼は憎むべき軍隊のブルジョワ国家権力としての存在を「軍隊は、常に国内の秩序を保持するために使用せられたりき。さらに痛切に言えば、平民がその正当な権利を要求して起る時、権力階級の財布保護の為に、これを鎮圧するに使用せられたるなり。」(訳載論文「新兵諸君に与う」)と見、軍隊が警察権力と共にブルジョワ階級支配の最も強力な「最後の切り札」として存在していることを見抜いている。それ故に、ブルジョワ階級にとって非軍備主義(反軍)闘争が、「敵の急所」を突く闘いであることが強調されるわけであるが、プロレタリア階級にとって反軍闘争が革命運動の中において、或いは革命論構築の上においていかなる位置を占めるのかは具体的に考察されていない。

「何故に政府はかくもこの非軍備主義の声に戦慄するのか。恐怖するのか。これは言うまでもなく、その最も急所とするところを刺されるからなのである。政府は迫害をして、そしてその最も痛手とするところを白状するのである。君ッ、敵の急所はここだよ、敵の痛手はここだよ。」(「非軍備主義運動」)

当時において反軍闘争の重要性と意義に着目し、いち早く叫んでいるのは、さすが大杉は「眼の人」であると思わせる。そして更に大杉の反軍論は突き進み、天皇制イデオロギーが最も純粋培養されている「軍隊の破壊」を叫ぶまでに至っている。すなわち、兵士の革命的な獲得を叫ぶわけであるが、その根拠も兵士も労働者と共に「平民の子」であると言う事実に楽観的に求めるわけである。

「軍隊は平民をして奴隷の地位におかしむる、最良の機関である。軍隊の存在する間、平民の完全なる自由は獲得せられない。そして彼らは決心した。革命の最良方法は先づ、この軍隊を破壊し去るにある。軍隊を組成する兵士は、同じくこれ平民の子である。平民の間に、兵士の間にこの一大事業を教示する為に、我々は活発なる伝道をはじめねばならぬ。」(「非軍備主義運動」)

大杉の反軍論が「隊内反乱—軍隊解体」まで叫ばれながら、天皇制権力や天皇制イデオロギーとの対決を通した「階級形成—人民武装」論の核心が回避されたのは何故だろうか。大杉の「軍隊破壊」論は、多分にエルヴェの焼き直しであるにせよ、「階級戦争論」者としての必然的な思想的産物である。しからば、大杉は日本において天皇制イデオロギーと対決せずして、ナショナリズムが超克でき、軍隊が破壊できると思っていたのであろうか。天皇制権力や天皇制イデオロギーとの対決は、アナルコサンディカリズムの革命論と根本的に矛盾するのであろうか。大杉は天皇制イデオロギーの独自的政治的=階級的役割を見落していたのであろうか。

どれもこれも答えはみな「否」である。ならば、何故にあれほど精力的な大杉が天皇制権力や天皇制イデオロギーを具体的に、根底的に糾弾し、批判した論文を残していないのか?

大杉は欧米の反戦思想とアナルコサンディカリズムを踏み台にして、彼なりの未形成で不統一な形にせよ、革命論としての一つの具体的な戦略を出している。すなわち、戦時における労働者のゼネストの決行と軍隊の革命的兵士の隊内反乱の結合である。だが、大杉はこれを思想的にも実践的にも如何に準備し、その「結合の環」を何に求めるかは述べていない。

何故か?

やはり、その最大の要因は大杉に「権力論—階級形成論」がなかった点にあるといえるのではなかろうか。(自己権力論の深化もあまり重視されていなかった)元来、プルードン—クロポトキンの流れを汲むアナキズムでは、「階級形成論—権力論」はマルクス主義の領域としてタブー視していた。だが、バクーニン等は多分に第一インターにおいてのマルクスとの抗争もあってか、これを単純に切り捨ててはおらず、模索している。

それと同時に、階級形成論を否定するような結論を出しかねないベルクソン流の「生の哲学」の負の側面の影響がある。

第二点はナショナリズムの超克—インターナショナリズムの獲得についての認識上の誤りがあったのではなかろうか。ナショナリズムの超克が、幸徳流の単なる社会主義の対峙ではなく、具体的なナショナリズムの化身たる天皇制イデオロギーとの対決にあり、帝国主義民族のインターナショナリズムの出発もそこから始まるという認識の問題であった。エルヴェが結局フランスナショナリズムに吸引されていった原因もここにあるのではないのか?

以上の点からも、大杉の革命論の中で反戦反軍思想は確かに片方の軸を占めるけれども、革命論構築の水路は主として直接行動論からのアプローチであったようだ。(つづく)

大杉に関する新刊二冊

今年になって大杉栄に関する書物が二冊、相次いで刊行された。一つは秋山清、大沢正道『**幸徳　大杉　石川**』(九二〇円　北日本出版社—富山市総曲輪四丁目一〇—六)、いま一つは大杉栄著、望月桂画『**漫文漫画**』の覆刻版(五〇〇円　黒色戦線社—伊勢崎市中町和田　大島英三郎方)だ。偶然の一致だが、いずれも地方にあって営々と努めている出版者の刊行だというのは示唆的である。徒らに時流を追う(じつは追われている)中央の出版界の眼の低さがよく見える。

『**幸徳　大杉　石川**』に収められた大沢の「大杉栄」は、安保闘争の直後、一九六〇年九月—十一月に『思想の科学』に連載された論文の再刊で、ほかに秋山の「幸徳秋水」、大沢の「石川三四郎」が収録されている。三人の代表的なアナキスト思想家の概略をつかむのに恰好の書といえよう。三人の詳細な著書目録も付され、親切である。

『**漫文漫画**』は一九二二年(大正十一年)にアルスから刊行されたものの覆刻だが、判型は変えられている。大杉の文章はいずれも他で発表されたものの再録なのだが、望月の軽妙な漫画とうまくマッチして、互いに相乗効果を示している。巻頭の堺利彦、大杉栄、高畠素之、岩佐作太郎、山川均、荒畑寒村、それに望月自身の似顔は秀逸で、大正社会主義の開放性をほうふつとさせる。定価も五百円と今時珍らしい廉価版である。